

タイトル 『白狐』 作 白井美佐子

登場人物 男3名・女4名・クロス8名

安倍 晴明 (アベノ セイメイ) 陰陽博士

百葉 (ヒヤクヨウ) 白狐・晴明の実母

比丘尼 (ビクニ) 百葉・千樹の古い友人

花蜜 (カミツ) 晴明の式神・つつじの花の精霊

千樹 (センジュ) 白狐・晴明の祖母

保名 (ヤスナ) 晴明の父

平助(爺) (ヘイスケ) 晴明を幼い頃より世話してきた安倍家の使用人・通称「じい」

魔1 (魔・貴族のクロス)

魔2 (魔・貴族のクロス)

魔3 (魔・貴族のクロス)

魔4 (魔・貴族のクロス)

魔5 (魔・村人のクロス)

魔6 (魔・村人のクロス)

魔7 (魔・村人のクロス)

魔8 (魔・村人のクロス)

序章

暗闇が広がる。
中央に晴明桔梗印がうつすらと浮かび上がる。
星型のマークの各頂上部分に「魔」1〜5が伏している。
桔梗印の後方に「魔」6〜8が伏す。
桔梗印の中央に人影が立つ。
安倍晴明である。

魔 1 北に玄武
魔 2 東に青龍
魔 3 西に百虎
魔 4 南に朱雀
魔 5 平安の。
魔 6 鬼門守る。
魔 7 この家に。
魔 8 鬼とも呼ばれる。
魔 1 ヒトの棲む。
魔 2 鬼門守る。
魔 3 家なれど。
魔 4 鬼とも呼ばれる。
魔 5 ヒトの棲む。
魔 6 我らに近き。
魔 7 我らに近き、その力。
魔 8 放てよ。
魔（8人） 晴明。

第一幕

晴明宅

天曆二年（九四八年）、春の昼下がりに。

晴明が座敷に座り、書き物をしている。

庭では花蜜が掃除をしている。

平助が白湯を持ってきて晴明に出す。

鳥のさえずりが聞こえる。

晴明 何を思い、鳴いているのだらうね、あの鳥は。

花蜜、掃除の手をやめ、晴明の方を向きかしくまる。

平助、縁側で豆を干している。

晴明 お前は何を思い、私に仕えてくれているのだらうね、花蜜。

花蜜、聞いている。

晴明 つつじの見頃ももうじき終わる。あの森が…、信太の森が恋しくはないかい？

花蜜、ただ清明を見つめている。
清明、白湯を飲むつとして白湯に人形ひとがたが写っていることに気付き見つめてい
る。

平助 おや、茶碗にまた誰か写りましたかな。
清明 もうじき…、あるお方がみえる。その方に会うことで私は、私でなくなっ
てしま
いそうな気がするのだ。

平助 と、申しますと？

清明 私の在り方がゆらぐような、そんな心もちだ。

平助 それは大事じゃございませんか！ なにかろくでもないことが起きそうな時は
唐辛子をつるして置くのがいいそうです。童子丸様、すぐにも爺が作りましょ
う。

清明 じい…、その名は幼き頃の名。やめよと申したではないか。

平助 わしにはこの御名の方がしっくりいくのじゃがなあ。

清明 今は清明だよ、じい。それに、申し出はありがたいのだが私も唐辛子は苦手だね。

平助 おや、そうでしたっけ？ まさか魔物をやっつけるうちに変なモノでももらった
んじゃないでしょうな？ 唐辛子が苦手だなんて、爺は初耳ですよ。

清明 じいもなかなか言うねえ。今のところ、障りはないようだよ。
それを伺ってホツとしましたわ。その、茶碗ですがいつも写るモノとは違つので
すか？

平助 そうだね…。私にとって鬼よりももっと怖いモノ、なのかもしれないね。
鬼よりももっと怖いモノ？ そんな恐ろしいモノが写ったんですか？

清明 私にとつてはね。

平助 ひゃあ、見たくないもんです。そんなモノ。もっとも見ようたってわしには見え
ませんがね。

花蜜、清明を見る。

清明 ……続けてよいよ。

花蜜、掃除に戻る。

しばらくの間。

突然、鳥のさえずりが止む。

舞台、一瞬暗くなる。魔の仕業だ。

平助 ひゃっ！ 何だ、真つ暗じゃ。清明様？

清明 じい、動かないで。大丈夫。

暗闇にバサツとモノの落ちる音。

平助 何じゃ、何が起こったんじゃ？

清明 動かないで。

薄明かりの中、「魔」の「クロス」、清明と平助の周りをゆっくりと這い回る。
平助にはそれが見えない。

平助に手を出そうとする「魔」を晴明が印を結び、撥ね退ける。
舞台、何ごともなかったかのように明かりが戻る。

平助

晴明様、なんですか、今のは？

晴明

何者かがちよつかいをだしたようですね。

平助

何者かって、何者ですか？

晴明

すぐに分かるよ。

平助

花蜜、どうした？

花蜜が慌てて庭に落ちてきた小鳥を手に晴明の近くに行く。

平助

何じゃ？ 花蜜？（花蜜の手を覗き込み） 鳥？ さっきの音は鳥が落ちて来た音？ なんで鳥がいきなり落ちてくるんです？

晴明

さっきの「何者」がここを包んだ時にぶつかったんでしょ。

平助

ぶつかった？ はて？

晴明

花蜜、戻してほしいのかい？

平助

そんなに案じずとも晴明様が何とかしてくれるじゃろ。おお、泣くな、泣くな。

晴明

じい。たやすく何とか出来るなんて言わないでおくれ。私にも出来ないことはあるんだから。

平助

ほら、晴明様がそんなこと仰るから花蜜が泣きそうですわい。

晴明

花蜜、懇願するように晴明を見ている。

晴明

分かったよ…。

晴明、花蜜の手に自分の手をあて、小鳥を包む形になる。

晴明

鳥の鳴き声が聞こえる。

平助

おっ、生き返った！ さすが晴明様。よかったのぉ、花蜜。

晴明

花蜜、嬉しそうに平助と晴明を見て、鳥を大事に抱えながら庭に行く。

晴明

生き返ったのではないよ。

平助

だって、どう見ても死んでましたよ？

晴明

まだ、死んではいなかった。

平助

生き返らせたんじゃないんですか？

晴明

まだ、命の灯は消えていなかったからね。ちょっと「気」を入れてあげただけだよ。

平助

ああ、そうでしたか。晴明様はいつの間にか生き物を生き返らせる術まで身につけられたかと思いましたよ。

晴明

じい、陰陽道にはそういう術もあるのだよ。これは違ったけれど。

平助

えっ！ そうなんですか？

晴明

晴明様、わしがみまかったときには…。

平助

縁起でもないぞ、じい！

晴明

はぁ、すみません。しかし、年寄りには心の蔵に悪いですな。いきなり暗くなったり、もどったり。死んだと思った鳥が飛んでいったり…。

平助

じい、他の者よりはだいぶんと耳目を広めてると思つよ。

晴明

じつは、わしもそう思うつもりです！

平助

じつは、わしもそう思うつもりです！

晴明

じつは、わしもそう思うつもりです！

平助

じつは、わしもそう思うつもりです！

晴明

じつは、わしもそう思うつもりです！

平助

じつは、わしもそう思うつもりです！

晴明

じつは、わしもそう思うつもりです！

平助

じつは、わしもそう思うつもりです！

晴明

じつは、わしもそう思うつもりです！

平助

じつは、わしもそう思うつもりです！

晴明

じつは、わしもそう思うつもりです！

平助

じつは、わしもそう思うつもりです！

晴明

じつは、わしもそう思うつもりです！

平助

じつは、わしもそう思うつもりです！

晴明

じつは、わしもそう思うつもりです！

平助

じつは、わしもそう思うつもりです！

花蜜、嬉しそうに小鳥を放す。

平助 花蜜はまるでわしらと同じ人のようすなあ。

晴明 花蜜は他の式神とは違うからね。

平助 ほあ。どう違うんです？ 怖い顔をしていないとか？

晴明 じい、式神はみんな怖い顔ばかりではないよ。もちろん、私は鬼神も使うけれど花や木の精霊もたくさんいる。そういつものは怖い顔などしてないよ。みんな私によく仕えてくれている。花蜜はね、その中でもより人に近い心をもっているんだ。そして、懐かしい匂いを…。

その時、魔が放つ強風が吹き荒れ、花蜜、飛ばされて舞台上から消える。

晴明 花蜜！

平助 花蜜、花蜜や！ 晴明様？ うう、なんだか胃のあたりがムカムムしてきた。なんじゃ、いきなり…。さっきの饅頭かのあ？

晴明、庭に降りる。

風（の音）は弱まりながらもまだふいている。

平助も晴明の後に続く。

つつじの花が一房、落ちてくる。

晴明、それを拾い上げるとまた風が強くふき始める。

平助

晴明様！ いったい何が…。花蜜が飛ばされて、わしは胃の腑がむかむかして…。あ、それは饅頭のせいじゃ、きつと。晴明様、何をしてるんです！ 早く花蜜を助けねば！ 晴明様が動かないのであれば、この平助が老体に鞭うってでも助けに行かねば！

落ち着いて、じい。

花蜜がさらわれた！

私が戻すよ。

晴明様？

晴明 さ、じい。中に入っていて。老体に鞭打つことはないから。

平助 はあ。でも…。

晴明 さあ、中へ。

平助、屋敷の中に入り晴明を見守る。

晴明、懐から知恵の珠（ちえのじゅ・数珠のようなもの）を出し、花が飛ばないように片手で押さえながらしゃがみこみ

天地太晴、日月太明、陰陽太和、なれば我が物は我がもとに 速やかに戻りたまえ。

つつじの花に息を吹きかけると、風、更に強くなり花が飛ばされ、そこから花蜜が現れ晴明の前にひざまづく。

晴明

おあ、花蜜や！
どうも人の式神にちよっかいを出す、いけないモノがいるようす

平助 そんなことが出来るんですか？ 人の式神に手を出すとはい、よっぽど強くなければ出来ないんじゃないですか？

清明 他の者が使う式神を隠すというのは出来ないことではないけれど、その辺の魍魎には出来ないでしょう。そういう意味ではよっぽど強いと言えますね。

平助 はあ、やっぱり清明様はすごいんですね。それを取りかえすんですもんね。それにしてもさっきは気持ち悪かったのぉ。胃のあたりがムカムカして。今はもう治りました。食べすぎですかねえ？

清明 ……じい。食べすぎと言うほど何を食べたのだ？

平助 いえ、ちよつともらいもんの饅頭をね。今日のは美味いんですよ。この前の「みのや」のあんより格別に美味い。やはり、あんは「こしや」ですなあ。この後をひかない甘さがいい！ 清明様はどっちがお好みで？

清明 私は「こしや」が好きだなあ。

平助 清明様もツウですね！ 清明様の分はちゃんとして残してありますからね、案じないでください。お持ちしましょうか？ 今、召し上がります？

門の方から村人（魔のクロス）が入ってくる。

村人（魔5） ごめんくださいまし。今日は捕れたての鮎をお持ちしました。いかがでしょうか？

平助 おお、いつもすまんの。清明様、今日は鮎で如何でしょうか？

清明 いいですね。いつもいきのいいものがあります。

村人（魔5） いえいえ。清明様に召し上がっていただけるとは幸いです。

村人（魔6） 鮎の添え物に漬物はいかがでしょうか？ うちで漬けた大根です。

平助 あきない上手じゃの。今日のも美味そう。ひとつもらっておこうかの。

村人（魔6） ありがとうございます。

清明 あなたの所の漬物はいつもおいしく頂いていますよ。

村人（魔6） そう言っていただけると漬けたかがあります。いつもたくさん買って頂いてありがとうございます。

平助 これからも美味しいものを頼むよ。

村人（魔5） はい、もちろんですとも！

村人（魔6） ありがとうございます！

村人、鮎と漬物を置き、帰っていく。

平助 晩のおかずが決まりましたな。

清明 酒が美味しく飲めそうです。

平助 まずは饅頭ですね。

清明、ふと空を見上げながら

清明 さっきのじいの気持ち悪さは饅頭のせいではなさそうですよ。どつやら饅頭を食べるひまはなさそうですねえ…。

平助 おや、また何か来なすったか？ 忙しいのぉ。じゃが、わしのムカムカが食べ過ぎのせいじゃないとしたら、気持ち悪いのは何でじゃ？

清明 悪い「気」を感じて気持ち悪くなったんでしょう。

平助 成るほど！ わしのカンもなかなかのモンですね。腹で感じる「悪い気」！ はっはっは。饅頭は一仕事終えてからになりますな。わしはそこで先に頂いとりま

す。
清明 気持ち悪いんじゃないのかい？
平助 食べ過ぎじゃないなら、まだまだいけます！
清明 …私のも残しておいてくれよ、じい。
平助 もちろんですとも！

明かり、暗くなり清明の周りにだけ「魔」を表す明かりが集まる。

魔 8

清明…。安倍清明よ、お前は我らに近き者。我らと並ぶ比類なきその力。人の世では恐れられるばかりであるう？、今までお前はひとりではなかったか？ 思い出してみよ、お前の孤独、苦しみ、悲しみを。人の目にお前はどう写ってきたのだ？

別エリアに村人(魔6、7)の影が浮かび上がる。

村人(魔7) 知ってるかい？ アベノセイメイは狐の子だってもっぱらの噂だよ。

村人(魔6) ああ、見たことあるとも。いつもうちの漬物を売りに行くからね。ほんとに真っ白な顔で狐みたいだよ。

村人(魔7) 恐ろしくはなかったかい？ 何でも鬼と共に暮らしてて、一言言うだけで人も殺せるそうじゃないか。

村人(魔6) そりゃ、恐ろしかったさ。しかし、いいお客なんだよ。

村人(魔7) わしらとは違うモンだからねえ。鬼が来ないようにちゃんとまじないしてるのかい？

村人(魔6) もちろんしてるさ。ちゃんとセイメイの家へ行った日は、ヤツの家から片足ずつ「貧福^{ひんぷく}、貧福」と繰り返し言っただけで帰るんだ。もちろん、家の中には福で入るのさ。

村人(魔7) ぶつぶつ言いながら歩くつづつのは、人に見られると恥ずかしいこつたな。もし途中で話し掛けられたらどうするんだ？

村人(魔6) 「貧福」言いながら走って逃げる。

村人(魔7) 何とも間抜けだな。

村人(魔6) 仕方ないだろう！ そうしないと鬼が来るってえ言い伝えなんだから。やらなにかかあに怒られるしよあ。

村人(魔7) おめえんとこのかかあは怖えもんな。で、今、お前さんがここにいるってことは、まじないが効いたってことだ。

村人(魔6) そうとも！

村人(魔7) 効き目はあるんだな。

村人(魔6) 俺でためさないでくれよ。

続く